

シオニズムとパレスチナ問題

小野修

(同志社大学名誉教授)

1. 分離壁

イスラエルとパレスチナの和平問題を考えるとき、最も印象的なイメージとして思い浮かぶのはこの二つの国の「境界」に延々と続くコンクリートの高い障壁である。

この建設をはじめたのは 2001 年にイスラエルの首相に選出されたアリエル・シャロンであった。軍司令官出身のシャロン首相は境界線をめぐって頻発する軍事衝突や双方からの侵入を回避する目的で、まずエルサレム東部の紛糾地域から道路沿いに高さ平均 9 メートルのコンクリート壁を並列することからはじめた。これはパレスチナ住民の便宜をほとんど無視したかたちで、専らイスラエル住民の安全を優先的に考慮したもので、軍や住民同士の武力衝突を目的としていた。

こうした障壁に類似したものとして古くは東西ベルリンの地区を分断して築かれていた壁や、北アイルランドの首都ベルファーストにプロテスタントとカトリックの居住地を分断するかたちで今も存在する 20 キロメートルあまりの本格的で高い障壁である。

イスラエル政府が、パレスチナの西岸地区の「首都」としてラマラを指定し、ファタ派の首領であったアラファト首相（当時）が、ハマスが支配権を握ったガザからこちらに政庁を移し、文字通りパレスチナが対立する二つの派に分かれてしまった段階で、テルアビブ側には隣接するラマラからの住民の流入を防ぐ目的から、その境界線上に頑丈で 13 メートルにも及ぶ高い障壁をめぐらせ人や車輛の出入りを厳しく取り締まるチェックポイントを設けた。障壁の上には兵士の監視塔があり、監視カメラが設置され、いつ行っても車と人々が行列する埃っぽく物々しい風景を呈している。

エルサレムではじまったこの分離壁は、その後次々と延長され、ガザ地区を隔離するとともに、両岸地域のイスラエ領に沿って蛇行しつつ北上し、2008年九月の段階では723キロメートル(454miles)に及ぶとBBCで伝えられている。これは東京上野からJRで北上して青森駅に至る727キロをはるかに上回る距離である。しかも、この障壁がイスラエルの国境線を表示しているわけでもない。

その誕生から20年たった今、「イスラエルは明確な国際上の国境線をもたない世界でただ一つの国である」とユダヤ系フランス人で研究家のアンドレ・シュラキはその著『イスラエル』で述べている¹。今年、2008年、イスラエルは建国60年を祝ったが、イスラエルの国境は今も明確になっていない。

それにしてもなぜこのような障壁がこれほどの長距離にわたって必要なのか。古代中国の漢の時代の長城や、東西ベルリンを区切る壁は、過去の遺物である。イスラエルとパレスチナを区切るこの長壁の建設とその保持、ひいてはその延長は、その背後にユダヤ人のイスラエルへの移住—それは「祖国への帰還」とまで言われている民族的大移動の結果でもあった。それはソヴィエト連邦の崩壊の時期にも、ウクライナやベラルーシ地方などから年間一万人未満という配量でロシア系ユダヤ人が空路、ベン・グリオン空港に降り立っていた。

その後イスラエルの経済成長と軍事的拡充を支えるために北アフリカ、中東、アジアからもユダヤ系ではない低賃金労働者の盛んな人口流入が続いた。

イスラエルの急激な人口増大と経済成長はイスラエル人のパレスチナ領土内に1967年の第三次中東戦争終結時に設定された境界を越えて流入が軍事的保護のもとでまずガザ地区において、次いで西岸地域において進められた。パレスチナ人がほとんど無防備のかたちでイスラエル人の強引な土地の接收と囲い込みを行うことではじまる果てしのない連日の衝突事件は、軍事司令官の経歴をもつシャロン首相に分離壁の建設を決断させた。シャロン首相が突然のイスラム教徒専用の「神殿の丘」への多数の平服の兵士を伴っての「視察」はにわかかなイスラム教徒との更に大きな対立の火種を用意することになり、分離壁は加速度的にその延長距離をのばしていった。

¹ アンドレ・シュラキ 『イスラエル』 増田治子訳 クセジュ文庫、1974。

こうしたイスラエルの領土拡張と流入人口の増大を支えつづけ、またイスラエル国内外のユダヤ系市民にイスラエル帰還と繁栄の夢を与えつづけたのがシオニズムという聖地エルサレムを含む「祖国」イスラエルへの帰還運動の思想とその活動家たちであった。

2. ユダヤ人の離散（ディアスポラ）の起源

新約聖書、とくにイエス・キリストの言行録にあたる福音書の筆頭におかれているマタイによる伝記は、その冒頭を次の文章ではじめている。

「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図」——この言葉はイエスがユダヤの家系を継ぐものとして、第1章17節で、アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロン移住まで14代、バビロンからキリストまで14代と書かれている。

改めて宗教改革期のマルティン・ルターの言葉をかりなくとも、「イエスはユダヤ人である」ことは明らかである。イエスはその生涯をA.D.33年頃にユダヤ人の民衆の承認によって処刑された。犠牲となったこの段階ユダヤ人イエスは香油をぬられたもの、という意味のキリストという名を帯びるようになった。

キリスト教徒によるユダヤ人に対する憎悪と差別の歴史は、イエスと同時代のユダヤ市民がイエスをキリスト、つまりメシアであると認めず処刑したことによる。7世紀にムハンマドの興したイスラム教もコーランの教えに従って、イッサ（イエス）を予言者のひとりと認めているにすぎない。イエスが旧約聖書で予言されていた救世主（メシア）であり、「天の父なる神と聖霊と子の三位一体」をかたちづくるという信仰がローマ帝国の国教とされるまでにまだ三世紀を必要とした。

その直後からキリストの使徒たちの努力もあってキリスト教は古代ギリシャ精神の影響下にあったローマ帝国の支配地域に徐々に伝播しはじめ、A.D.（キリスト紀元 Anno Domini）70にローマの神殿の建設をエルサレムに建てることを命じた皇帝ティトウスの命を拒んだため、ローマ軍はエルサレムを包囲占領、ユダヤ人は追放され、エルサレムに戻ることを禁じられた。ローマ政府に

抵抗するユダヤ使徒と潜入分子はヘロデ王が冬の別荘として建てた死海沿いの岩山マサダの要塞にあわせて千人が立てこもったあと、包囲したローマ軍に降伏することを拒んで、集団自決し全滅した。その約 60 年後、ハドリアヌス帝のもとでユダヤ人の Barkochba の率いる反乱が起こった。

当初はユダヤ信仰に同情を示していたハドリアヌスも歴史家タキツスの影響もあって東方嫌うようになった。特に彼はユダヤ信仰における割礼の慣習を、耐え難い死に至る痛みを自らに加える悪しき行為として嫌った。彼はギリシヤ的な政治制度を東方一円に広め、その政策の一端としてエルサレムの廢墟の上に、全く新しい異教的都市を築き、宮殿の丘の上にローマ風のジュピターの神殿を建設するというものだった。ユダヤ国の名称を嫌ってキプロス人の土地を意味するパレスチナという名前をつけた。

その後パレスチナ地方でユダヤ人の地方での頑強な蜂起が起こった。ハドリアヌス皇帝は、遠くは英国のブリテン派遣軍からダニューブ流域方面軍まで加えた 12 軍団を投入した。ローマ軍の組織的で周到な戦略の前にユダヤの抗争勢力は押しつぶされ、最後には防塁もないエルサレム周辺で地下要塞まで掘り抜いてローマ軍に抵抗したが遂にエルサレムが落城した。このとき西暦 135 年、以来 19 世紀中頃に至るまで、エルサレムには事実上、ひとりのユダヤ人も住んでいなかった。ごくわずかの人数がパレスチナに住んでいただけである²。ユダヤ人は帰るべき郷土を消失して、離散した。これがディアスポラと呼ばれるユダヤ人四散分裂の苦しみの始まりであった。

ハドリアヌス帝の時代バール・コチバの反乱 (132 - 135 年) で完敗を喫したユダヤ民族は国家を失い、自らを律する行政的中心地も文化的中心地すらも失って四散した。この「ディアスポラ」と呼ばれる流浪の中で彼らの唯一の拠り所はシナゴグと呼ばれる地域集会所のみであった。

ローマ帝国の時代、ユダヤ人はカラカラ帝のもと (212 年) 市民権を得て帝国内の至るところ、特に小アジア、バルカン半島、アフリカ、スペインなどに定着していた。しかしやがて彼らに対する憎悪心が居住地域で昂まったのは、ユダヤ人特有の宗教と分離主義のためであった。彼らは「唯一神エホヴァ」のみを崇拝する一神教徒で、偶像崇拝を排し、宗教儀式に関する潔癖さが住民の

² Paul Johnson, *A History of the Jews*, 1987, N.Y.P, P.139-141.

反感を招いた。

ギリシャ文明の影響下に明確な精神世界を形づくって行ったローマ帝国は、その多神教的で世俗的信仰をキリスト教の伝播のもとで徐々に失って行った。ローマ帝国は西暦四世紀の段階に入り、コンスタンチヌス大帝のもとでローマを政治軍事的首都とする一方、トルコのビザンチウムをコンスタンチノープルと改名、信仰文化の首都としたとき、ローマ帝国のキリスト教的文化体制の二重の基礎がかためられた。紀元 600 年代にはローマ帝国の版図のすべては、地中海沿海地域はもとより、大西洋上のアイルランド・ブリテン島に至るまでがキリスト教に改宗した。その中でも旧来からの文化交易ないし政治、軍事的な枢要地域のほとんどにキリスト教宣教師の基地がつくられキリスト教の信仰集団が根をおろしていた。

四世紀の終わり頃ローマ帝国が東西に分裂し、西はローマ・カトリック教会、東はギリシャ聖教会が使徒を率いる中で、時代は、ゲルマン民族の西への流入など、世界規模での民族大移動がロシア、北欧そして欧州各地の衝突、分裂、融合などによる群小国家軍を生み出す一方で、7 世紀アラビアを中心に興隆したイスラム教が急速にその信仰の版図をを拡げた。

西暦 610 年に、予言者ムハンマドが神の召命を感じ、アラーを唯一神とするイスラム教を興し、聖典（コーラン）を唯一の神の言葉として奉ずる宗教集団を組織し、その宗教勢力はわずか一世紀あまりの間にアラビア半島を中心として地中海の西の果て北アフリカ、東は中東のカブールまで拡大、本拠地のメッカ、メディナのほか、ダマスカスにはカリフ（サルタンの居城）が設けられた。ムハンマドの死後、内紛のため、シーア派とスンニ派に分かれたが、教団の基本理念は保持され続けた。

コーランの内容が示しているように、イスラムはユダヤ教の唯一神信仰の伝統を受け継いでおり、イエスを予言者としてのみ尊重している。イスラム教徒にとってアラーは、ユダヤ教徒にとってのエホヴァに匹敵する。予言者イッサ（イエス）がエルサレムの城内から昇天したと同様、予言者ムハンマドもエルサレムの城内の神殿の丘から昇天したと信じられていて、その地にそれを記念する黄金のドームが建てられ、メッカに次ぐ聖地となっている。

3. 中世の暗黒

中世が「暗黒時代」であったということは、身分の低い農奴や被差別民にとっては事実であり、ユダヤ人にとっては特に厳しい現実であった。

ユダヤ人がローマ・カトリック教会の庇護を公式に授けたのはグレゴリウス教皇（540? - 604）の布告であり、ユダヤ人は洗礼を強制されず、むしろ外国人としての恩義を与えるように指示していた。この後更にカロリング王朝のルイ I 世（敬虔王 814 - 840）により、ユダヤ系の特定個人に様々な特権を与えることが伝統的に受け継がれることになった。

キリスト教徒には禁じられている金貸し業務は、ユダヤ人に押し付けられ、ユダヤ人が債権者、キリスト教徒が債務者となる慣習が定着した。

これは第一回十字軍の出動の際に、このことが原因で起こったユダヤ人虐殺（Pogroms）のあとの業務にあたる、ユダヤ人を個々に異教徒として法的に保護する必要が生じたためである。

1236 年、神聖ローマ帝国のフリードリッヒ二世の治下でユダヤ人は「王室の従僕」としていわば、皇帝の収入役の任務を個人として、また経済的にも皇帝に維存するかたちで認められた。すでに第四回ラテラノ宗教会議（1215 年）でユダヤ人に対する処遇はきまっていて、それに従ったものであった。³

皮肉なことに、同じ年、英国では貴族がジョン王にマグナ・カルタという人権の大憲章を認めさせ、1290 年にはエドワード王が模範会議を招集させているものの、エドワード王はユダヤ人をイングランドから追放している。異教徒は保護の対象外であった。

その一世紀後、中央アジアで発生したペストが地中海を經由して、1347 年イタリアに上陸して北上、51 年までに北欧や東欧を含むヨーロッパ全域に広がり、その勢いが衰えるまでに人口の 3 分の 1 がその犠牲となった。⁴

この災厄に触発されてユダヤ人狩り（Pogroms）が起こり、ドイツでは 350 ものユダヤ人集落が破壊されたことから、十字軍遠征以来はじまっていた、ユ

³ Penguin Atlas of World History, Vol.1, p. 154, 155 を参照。

⁴ *Ibid.*

ダヤ人の出身地東方への移住を促進した。ユダヤ人の集落ではイディッシュ語 Yiddish がつかわれていて、中世のユダヤ人は皆ユダヤ人特有の衣服を着用させられていた。

1490年代スペイン、ポルトガルなどのカトリック教団からはユダヤ人が追放され、彼らはユダヤ人の出身地である東方をめざし地中海沿海の北アフリカ、北ないし南部イタリア、更にはコンスタンチノーブル海峡を北上してモルダヴィア経由でリトアニアやポーランドにまで至り定住するようになった。⁵

4. 中世の夜明け

ヨーロッパの封建制度が成熟する中世末期に至り、王侯貴族や少数の富裕層の間に学識を尊重する気風が昂まり、僧院での研究にかぎらず宗教的な束縛を脱した大学創設が、欧州大陸や英国でも次々に画期的な研究成果をもたらすようになった。

宗教的ないし、伝統的な因襲に束縛されない新しい学問がいわゆるユマニズムとして登場し、社会生活の中に未来に向けての希望をもたらすことになった。

アリストテレスの哲学をキリスト教神学の基礎として持ち込む知恵は、当時スペインに多く居住していたイスラム教徒を通じてトマス・アキナスにもたらされた。中世の夜明けは宗教的な支配構造の暗い因襲に光を当て、英明な君主は進んで変革の決断を下し、そうした基本的モデルは貴族達もジョン王に押しつけたマグナ・カルタ(1215年の大憲章)を成立させた様に時代を進歩させた。

勿論こうしたことは西暦前の古代ギリシャやローマに範をとったものであり、ソクラテスの時代の民主政治といっても、アテネの半数以上の奴隷的労働人口がいわゆる「民主的アテネ」を支えていたのである。

ヨーロッパ社会が封建的な土地所有から、富裕層の出現により、耕作地の私有がはじまり、土地の農作物が富を生み出し、それを支える資本が力を持つ社会へと徐々に進展しはじめるのに対して資本と労働の対立と矛盾を拓けることになった。

⁵ *Ibid.*

プロテスタンティズムが台頭するのは伝説的にローマ帝国あるいはローマ法王庁に批判的であった北ドイツにおいてであり、その旗手はマルティン・ルター（1483 - 1546）であった。その人間的視点は旧来の修道院での偽善と差別主義への糾弾と、地域教会にまで強制されたローマ法王庁からの免罪符の強制販売へ断固とした反論をはじめ、ラテン語の知識のない一般信者にラテン語聖書を強制せず、自ら高地ドイツ語という方言による新訳の新約聖書を出版し、更に僧職の妻帯を推進し、門下の修道僧たちを修道女と娶せ、自らも一人残った修道女を妻とした。

ルターはユダヤ人差別を取りあげて「われわれの主イエス・キリスト自身がユダヤ人として生まれたのではないか」とユダヤ人を弁護したが（1523年）、その2年後に農民一揆に対して断固たる態度をとるよう諸国の領主や王族に求め、政治的権力の安定のための軍事的統制の必要を強調した。従って社会的には農民の地位は19世紀まで据えおかれたが、ルターの点火した宗教改革はドイツをプロテスタンティズムの牙城とし、スペインのカルロス5世の率いるルター派の軍隊が1527年ローマを陥落させ、イタリア・ルネサンスの栄光に包まれたローマ法王とローマ市民は屈辱をなめさせられた。『君主論』の著者マキャヴェリは炎上するローマを遠くに見ながら客死した。

その2年後、トルコ軍がウィーンを方位し、持久戦に入った。トルコ軍を指揮した名君スレイマン大帝はローマの残虐を繰り返すまいとして兵を引き上げた。オスマン・トルコは安定期にあり、東欧攻略を急ぐ必要はなかった。エルサレムはもとより、エジプトからシリアをはさんでバグダッドまではそのイスラム帝国の支配下にあった。

他方、破綻したローマ教会の再興を誓ったのは戦場で片脚を失ったイグナシウス・ロヨラ（1491 - 1556）であった。ロヨラの創設したイエズス会は、日本を含むアジアならびに中南米に宣教師を派遣し、キリスト教を広めた。

ここで視点を聖都エルサレムに転じてみると、7世紀預言者ムハンマド（570 - 632）が中東アラビアから来たアフリカにわたり、イスラム教の台頭により、アラブ人が632年陥落させてから、短期間にアラブ人とトルコ人の違いはあってもイスラム教の聖地として第一次世界大戦末、1917年まで、エルサレムはイスラム教徒の聖地でもあり続けて今日に至る。キリスト教徒の支配下にあ

ったのは、1099～1187年、1229～1239年、ごく限られた短期間、第一回の十字軍、第二回の十字軍の遠征の時期であった。

1917年英国がトルコ領エルサレムを占領、エルサレムは英国の委任統治下に入り、1948年委任統治の期限が切れると同時に英国軍は撤収した。その前日、独立を宣言したイスラエル臨時政府はただちにエルサレムの都市部を、エルサレム旧市街はヨルダン軍が支配したが、1967年の第三次中東戦争で旧市街の大半をイスラエル軍が占領した。

しかし、エルサレムは、イスラエルは首都と定めているが、国際的には現在も未だ首都とは認められていない為、各国の大使館は首都機能を担っているテル・アビブに設置されている。

こうしてユダヤ人の長年にわたる聖地奪還の夢はかなえられた。とは言え、エルサレムはユダヤ教のほかイスラム教、そしてコプト派のキリスト教、ローマ・カトリック教会、ギリシャ聖教など、国際的な宗教の聖地としての地位は保全されて今日に至っている。

5. ユダヤ人の復権とシオニズム

16世紀のスペイン及びポルトガルによる植民地獲得競争はアメリカ大陸からアジアまで拡がり、長崎をはじめ京都や安土にまでその先達であるカトリック宣教師たちが武器を含む新しい西洋の文物を伝えることと引き換えに権益を手にしはじめた。

しかし1588年、英国エリザベス女王時代の海軍がスペインの無敵艦隊を破ったことから、征海権は英国に移り、17世紀初頭ジェームス1世が家康に交易を求める時代になり、英国の貿易収益の増大は、ロンドンの商工業者の興隆とその擁護者クロムウェルによるピューリタン革命でチャールズ1世の公開処刑が実行されるまでになった。

こうした up-side-down (さかさまの時代) は、デカルト、ニュートン、ベーコン、ホブズなどが切り開いて行った科学と啓蒙の時代を着実に根付かせて行った。18世紀が、アジアまで広がる植民地競争から新大陸アメリカの植民地

からの独立をもたらす一方で、英国ではじまった産業革命によって、一挙に 19 世紀自由平等人権意識の昂まりは民衆蜂起からフランス革命が起こり、やがてコルシカの一兵士であったナポレオンの指導する時代となった。19 世紀世界の工場となった英国で中間層の登場が選挙法改革をもたらしたばかりか、欧州全般に広がった自由と人権擁護の対策は、それまで差別と弾圧の対象となっていた、零落したユダヤ系住民に対する権利の回復が進むにつれて、大量の産業労働者として流入してきた。

18 世紀以降ユダヤ系住民への差別法の撤廃を宣言した国々；アメリカ合衆国 (1776)、フランス(1791)、19 世紀；ベルギー(1831)、オランダ (1848)、デンマーク (1849)、英国 (1858)、ドイツ(1871)、オーストリア(1868)、ハンガリー (1867)、イタリア (1870)

こうしたユダヤ系市民の復権にともなって、19 世紀はじめ、ユダヤ系市民による国を超えて結束を求める国際組織もつくられるようになった。ロシアでは 1881 年に発生したユダヤ人虐殺（ポグロム）の翌年、コンスタンチノーブルで地方の約 500 人の若者たちを中心に結成され、旗揚げして、エルサレムの象徴のシオン山の名をとったシオン愛好会 Hovevei Zion がクラコフ Bilu の会がユダヤ系市民が、今こそ目を覚まし結束してエルサレムへの帰還を目指そうと檄(マニフェスト)を飛ばしている。

イスラエル近代史の初めに登場するヘルツェル (Theodor Herzl, 1860-1904) は、シオニズムの政治的推進の創始者といわれ、その著『ユダヤ人の国家』(1896) で、次のように檄を飛ばしている。

中世の罪業が今日の欧州諸国に覆いかぶさっているということを一般大衆は気付いていない。我々はゲットー（貧民窟）の産物で、金融業で頭角をあらわした。それは中世の状況がそうさせたのだ。今、我々は再び金融業を強いられて——株式市場にいるわけだが——他の経済活動の分野からは閉め出されている。株式取引所において、つねに侮蔑の眼にさらされている。同時に、我々は中間層知識人層を大量につくり出しているのに、その働き場がない。そのため、これが我々の社会的立場と我々の増大する富を危険にさらしている。教養がありながら生活手段を持たないユダヤ人が、いま

や急速に社会主義者になって行っている。そのため、我々は今後きびしい階級闘争の間で苦しむことになる。何故か、それは我々は社会主義と資本主義の二陣営のぶつかる最前線におかれているからである。

この檄を飛ばした時代にはすでにカール・マルクスが『資本論』（1867年）を発表してから30年経ている。ユダヤ人であることを隠して、法律家になるためにカール・マルクスの父親がキリスト教徒に改宗していた18世紀末からすでに1世紀経ていたが、ユダヤ人は解放されていたわけでもなかった。

さきにあげた、ビルー集團の「1882年宣言」は、ユダヤ人の「祖国」がオスマン・トルコ領である現実を忘れて高望みしたわけでもない。彼らは2000年前のエルサレムを夢見ながら次のように願望を語っている。

1. 我が祖国、それは神の思し召しで我々に与えられたものだったと歴史の文書には書かれている。
2. サルタンにこのことを願い出て、可能であれば、国の一部なりと我々に所有させ、国内管理のみを我々にさせ、民事と政治的権利は持たせてもらい、外事権に関してはトルコ帝国が我々の保護にあたって行使するというかたちにしてもらえたらと願う

と書き、「シオンの土地こそが我々が希望」と結んでいる。

ユダヤ人の願望だけで現実が動く筈はない。ビルー集團やヘルツェルの宣言などを支える民衆の指示が必要であった。英国で産業革命がはじまってすでに100年をこえていた。世界の工場といわれた英国へユダヤ系の労働者が陸続と流入しており、その多くはロンドンやマンチェスターと言った都市部に住みついた。とりわけウェスト・エンドとして知られるロンドン東部の貧民街にはユダヤ系の市民がかたまっている居住していた。

『マイ・フェア・レディ』というオードリー・ヘプバーンの映画を知っている人も主人公の少女がウェスト・エンドのユダヤ系家族の出身であることを知らないことが多い。この作品の原作者、G.バーナード・شو (1856 - 1950) はアイルランド出身の劇作家で、アイルランドが英国の支配のもと、その差別と弾圧を経験した歴史を知り尽くしていた。彼自身も下町でストリート・ファイターとして暮らした経験を処女作にして世に出た。どん底の生活から貴婦人に

仕上げられていく少女の物語『ピグマリオン』は当時の在英ユダヤ人の二重性、富豪や政界の大立物となったユダヤ系市民と、無教養でどん底暮らしのユダヤ系労働者の存在を背景に現実味を帯びて任期を博した。

この二重性を長編の小説で書いて作家入りし、1868年に英国首相にまで登りつめたベンジャミン・ディズレーリがいる。彼の描く two-nations は労資の対立の構図を深めて行く英国の社会構造を意味していた。イスラエルという国名を抱く苗字も印象的である。

この時期、シオニズムを後押しする強力な支援者があらわれた。ジョージ・エリオットという筆名をつかった女流作家、メアリ・アン・エヴァンズ（1819 - 80）である。当時、考古学者チャールズ・ウォレン卿が1875年エルサレムの城壁の発掘で注目を浴びたあと、『約束の土地』という著作を出版、聖地エルサレムでのユダヤ人の数が1840年に1万人を超えたこともあり、英国支援のユダヤ人による企業体をつくり、トルコの負債を担うかわりにパレスチナを植民地にする夢を描くなど、シオニズムを支援する力にもなっていたが、ユダヤ系の主人公を扱ったジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』は超ベストセラーとなり、祖国再建への絶大な期待感をユダヤ系市民に与えることになった。彼らは本物のダニエル・デロンダとはどこの誰なのかを問いたがった。この本が出た翌年1877年、ジョージ・エリオットはバルフォア卿に会っており、そのバルフォア卿はシオニストへあてた宣言文を書簡のかたちで、ロスチャイルド卿宛に1917年11月2日に送っている。この有名な書簡の内容は「英国政府がパレスチナにユダヤ人の祖国をつくることに賛同し、最大限の支援をする」云々、の内容であった。⁶

19世紀後半のこの時期に三月革命などの動乱のはじまったドイツから、新大陸アメリカへユダヤ系市民が大量に移住して行った。その結果、在米ユダヤ系市民の総計は、1848年から1890年にかけて25万人にもなり、その大半は金融取引、卸売小売などの職種を代々受け継いできた家系の出身者であった。彼らはニューイングランドに住みついたピューリタンの子孫たちと共に投資銀行業務を独占していた。⁷

⁶ Paul Johnson, *A History of the Jews*, 1987, p. 379.

⁷ *Survial*, p. 148.

太平洋戦争勃発時のアメリカ大統領 F.D.ローズヴェルトはオランダ系のユダヤ人の家系に生まれ、その叔父にあたるシオドア・ローズベルト大統領は日露戦争終結後の調停役を実行してノーベル平和賞を受賞した。フランクリン・ローズヴェルトが昭和 20 年（1945 年）4 月に病死したあと、ハリー・S・トルーマンが大統領となり、この大統領が戦後間もなく連合国と設立した国連本部と世界銀行とをニューヨークとワシントンに設立し、ソ連との冷戦時代にそなえた。

トルーマンは、アメリカのイスラエル・ロビーにしつこくイスラエルの建国の承認をせまられたが、中々首を縦に振らなかった。米ソ対立の軍事上の構図からすれば、イスラエルの建国は国益に反するとして、アメリカの国防省もイギリスの陸軍省も反対していた。しかし、パレスチナ問題に関する国連の特別調査委員会が答申し、ユダヤ人の国家とアラブ人の国家を別々につくり、エルサレムを国際地区と指定する案が 33 対 13、棄権 10 票として総会で採択されると事態が急変しはじめ、ナチと戦ったスターリンが、一時的にであれシオニストびいきになり、社会主義的なイスラエルが建国がされれば中東におけるイギリスの影響力も減退すると考えていた様子で、グロムイコ外相も乗り気であったので、ソ連の衛星国もそろってこの分割案に投票した。その約半年後の 1948 年 5 月 14 日イスラエルが独立を宣言すると、トルーマン大統領はただちに実効的承認を与え、ソ連のスターリン首相は 3 日後に法的承認を与えたばかりでなく、ただちに衛星国だったチェコにテルアビブ空港に最新の武器を送らせて、見本市を開かせた。⁸

6. イスラエルの建国

1947 年 2 月 14 日、英国ノベヴァン首相はパレスチナ問題を国連に提訴することにしたと表明した。パレスチナでの緊張が昂まり、ユダヤ人の不法移住が続く一方で、アラブ諸国の間では不穏な状態が生じつつあり、この状態のままパレスチナを分割して二つの国家を生存可能なかたちで創造する（to create two

⁸ Paul Johnson, *op.cit*, p. 525.

viable states) ことは不可能であると述べた。アラブ諸国がこの案に賛同しない以上、委任統治を現状のままで実行することは難しい。そのため、英国政府は国連にこの委任統治をそのように修正するかを問うことにした。

国連はこれを受けて UNSCOP (国連パレスチナ問題特別委員会) を 11 の参加国で設立し、その報告ならびに提案を同年 8 月 31 日に公表した。

ユダヤ系代表機関は分割計画は“必要不可欠”として受け入れたが、アラブ諸国ならびにアラブ上級執行機関はこれを拒否した。同年 11 月 29 日、国連総会は分割案を表決にかけ、33 対 13 で承認した。この三分の二の多数票にはアメリカとソ連が含まれていたが、英国は含まれていなかった。⁹

第二次世界大戦の結果、ユダヤ人のヨーロッパにおける人口は半減した。ある統計によると、ナチによる大量殺戮でユダヤ人の欧州における人口は 950 万人から 400 万人以下に減少したといわれる。この数字は 1948 年、つまり戦後の急激な人口増加を含んでいるとすれば、殺戮の数字はもっと大きくなるだろう¹⁰。

戦後ユダヤ人の大量の移民がはじまり、イスラエルのユダヤ系移民 (aliyah) は建国からの 4 年間だけでも約 70 万人、そのうち 30 万人が東欧からの移民であった。イスラエルが独立を果たした翌 1948 年には 23 万 9 千人が移住してきている¹¹。この急増の原因はイスラエルが武力で独立を勝ち取ったことを、イスラエル新政府がユダヤ系市民を保護する力を持ち、ソ連がその後押しをしてくれると見たためである。

それにしても、この独立段階で英米二国がイスラエルの建国に支援をためらった理由は、ソ連東欧諸国との冷戦状況ばかりではなかった。イスラエル建国 60 周年を迎えた 2008 年の独立記念日のタイムズ紙の新聞論調でも、独立によってただちにはじめたアラブ連合軍との戦争に単独で勝利したイスラエル軍の壮挙にいまだに冷ややかな感想を漏らしているのも皮肉なことである。イスラエルの国の存在を承認させたのはイスラエルの民兵自身であり、英米は軍事的に援助を行わなかったからである。

⁹ P.65/ I-A Reader

¹⁰ *Terms of Survival*, p. 44.

¹¹ *Ibid.*, p. 67; *Atlas of World History*, p. 258.

確かに第二次大戦後のシオニストたちはイスラエルの建国に命を賭けていた。欧米に逃れた同胞に比べて、彼らを囲む状況の厳しさを十分に意識していたに違いない。

彼らはアラブの海に浮かぶ箱舟のようなパレスチナの土地でキブツと名づけた共同生活組織の中で生き残りをかけた日々を送っていた。

英国には前世紀から多数のユダヤ人労働者が住みついており、その数は第二次大戦終結時には45万人近くにも達しており、その三分の二が都市部、あとは都市近郊に住んでいた。彼らは英国国民であることに満足し、政治的にも影響を与えうる集団であることを自覚していた。もともと考え方が左翼であった彼らは労働党支持であり、1945年の総選挙の結果、28名のユダヤ系候補が当選、そのうち労働党は26名、保守党と共産党がそれぞれ1名であった。チャーチルの保守党にかわってアトリー首相の労働党内閣に戦後国民の期待がかけられた。しかし、その翌年、エルサレムのキング・デイヴィッド・ホテルの爆破事件が起これ、労働党の多くがシオニストに背を向けることになり、ベヴァン首相の英国のイスラエル建国案見直しに公然と賛同することになった。シオニストはテロリストの軍事組織なのかという目が向けられると、イスラエルを委任統治している英国陸軍省も考えを変えなければならなかったからである。¹²

事実その陸軍省の弱気につけこむようなことをシオニストの執行部は敢えて積極的に行う方針を固めた。つまり、テロ行為である。ソ連西部のブレストリウスク出身で、後年首相となったメナヘム・ベギンは郷土の3万人のユダヤ系住民の生き残りの10人の一人だった。彼はリトアニアで捕まり、ソ連の諜報機関NKVDの尋問に耐え抜き、強制収容所に入れられ極北の地で鉄道建設に使われたが、ポーランド軍に援けられ、軍の一兵卒としてエルサレムまで到達し、1943年シオニストの私設軍イルグンの指揮官として英国行政府に宣戦布告している。キング・デイヴィッド・ホテルの片方の棟を爆破して英国人28人、アラブ人41人、ユダヤ人17人など、多数を殺害している。英国政府にできるだけ多くの出費をさせて、英国勢力をパレスチナから追い出すのが目的であった。

ベギンはユダヤ人の犠牲者については弔意を表していたが、爆破の予告をしであったとして責任を英国政府にかぶせた。彼は英国人を標的とするのではな

¹² *Survival*, pp. 354-5.

く、英国政府の施設を次々に狙って破壊し、多大な損害を与え続けた。労働党政府のベヴァン外相はついに耐えかねてパレスチナ問題を国連に提訴した。こうしてイスラエルは、英国を押しつけて自らの力で独立を果たした。

1948年5月14日、イスラエルの独立を初代首相のベングリオンが宣言した。アラブ側はその夜から攻撃に出たが、イスラエル側にはチャーチルの発案で1944年7月12日、陸軍大臣に指示してつくらせた二旅団の軍隊もすでに4年間の戦闘訓練を重ねており、イスラエルが死守すべき主要都市や港湾を確保すべく配置し、ハガナなどの民兵組織も2万から4万3千の兵員に武装させてアラブ混成軍に対応する準備をしていた¹³。

宣言の出された翌日が、英国の国連による委任統治が終わる日であった。英国軍はイスラエルの民兵組織などに戦車を残して撤退して行った。この独立記念日の60周年にあたる日の新聞に、*The British did not care.* と見出しがついている¹⁴。

ナチス・ドイツとの北アフリカでの戦いエル・アラメインでドイツ軍を打ち破り、アフリカと中東での英国支配権を握ったアレンビー将軍が徒歩でエルサレムに入城する映像と、その5年後同じエルサレム付近でハガナの民兵に戦車をあてがって握手をして「頑張れ、負けるなよ」と言って去っていく英国兵士の様子は何故か奇妙に信じ難く思える。

7. パレスチナ問題の行方

2005年10月25日、イランのアーマディネジャド大統領は「シオニズム協議会のない世界」と題した演説を行った。

今日、イスラエルは新しい策略を試みている。パレスチナから撤退し、自国の隣にパレスチナの国を建設すると称しながら、パレスチナ人を互

¹³ Paul Johnson, *op. cit.*, p. 522.

¹⁴ *The Daily Yomiuri*, 2008年5月18日、記事はロンドンタイムズ、「英国側は何もしてくれなかった」の意味。

いに政治的立場の違いで争うように仕向けている。・・・

パレスチナ問題が終わるのは、パレスチナ政府がパレスチナ人民のものとして権力を持ち、全ての難民たちが祖国に戻り、人民によって選ばれた民主的な政府が政権を握るべきである。勿論その際、遠隔地からこの土地を我が物にしようとやってきた者たちに選挙に参加する権利はない。

パレスチナ人民が今後もこの戦いを続けるように望む。¹⁵

2007年2月9日、PLO（パレスチナ政治機構）のアムード・アバスが提示したハマスとファタ派の連合内閣文書を発表している。これはハマスのイスマイル・ハニヤを首相に任命するなどの内容で受領した段階でパレスチナがいまだに自主解放と国家家引接の途上にあることを考えて、来るべき国民統一政府が基盤とすべき原則をハマスの立場から8項目提示したものである。¹⁶ 政治分野、エルサレム、イスラエルによる占領への対策、治安、法的領域、経済、行政改革、パレスチナ人の伝統的価値観の尊重に詳細にわたって提案されている。ここではその最初の政治機構の部分のみを紹介しておきたい。

第一の前提条件としての国土、

この政府はイスラエルによるパレスチナの占領の終了と、パレスチナ人民の自治権が確認されることを前提としている。その政府はアラブ同胞ならびに国際社会の協力を得て占領を終結させ、パレスチナ人民の法的権利を回復する。独立国家としてのパレスチナは第一に、1967年に占領されたすべての地域と首都エルサレムに完全な主権が及ぶ。

しかし、連合内閣の組閣をハマスに依頼したアッバス議長はハマスとの内部抗争が昂じた2007年6月20日の段階で、PLOの中央評議会において「パレスチナの旗が踏みにじられ、ハマスが自分たちの旗を分派の旗としてかざしている」ときびしく糾弾するようになった。

¹⁵ The Israel-Arab Reader , p. 601

¹⁶ *Ibid*, pp. 622-25.

ハマスは我々国民的闘争の象徴とも言える記念物を、我々の殉教者ヤシル・アラファトやアブ・ジハドの家宅において次々に冒瀆し、ガザ市内ではエルサレムを指す無名兵士の像を引き倒した——これは殉教者たちの犠牲を示す記念碑であり、パレスチナの兵士たちの遺産であると共に、パレスチナ、エジプト、そしてアラブの人々の結束の象徴のはずであった。

ハマスが考え出した戦略はガザを西岸地域から切り離して、独立の首長国 (emirate)、つまり一つの旗のもとに統一された単一の過激派と、狂信的分子のみで作りあげたミニ国家を設立しようと考えている。

この計画を実現するために、彼らは軍事的政治的な準備として武装軍事組織を組織し、ハマスのみの指導によって訓練し、ガザ地区にあるパレスチナ指導部 (PA) を攻略し、その間、ハマスはガザで治安機関の現場の指揮官や治安機関の指導層、ガザのファタ派の活動のリーダーなどを暗殺してきている。我々の見聞した限りでも、パレスチナ史上に類例のない殺人や処刑が行われており、背教と背信の罪、住民の立ち退き強制、憎悪を助長したり、衝動的で扇動行為のむき出しの教唆の罪を根拠として執行されたのである。

このアッバス議長の演説は更に、この反乱分子 (ハマス) が国家保安隊、情報省、予防安全機構、大統領警護隊を攻撃し、パレスチナの遺産や伝統には全くそぐわないやり方で、暗殺、路上での処刑、高層からの墜死、保安本部や公共機関、さらにはキリスト教徒の祈祷所などを襲って略奪を重ねたと糾弾している。

アッバス議長は更に、

これら殺人者や反乱分子たちとは対話を交わすことはできない。パレスチナの歴史をふり返ってみても、自国の住民を暗殺し、家々や財産を荒らし、国民の象徴に恥辱を与えるなど、この暗黒の一週間にガザの反乱分子が行ったようなことは未だなかったことである。彼らは宗教の名のもとにと言うが、どの宗教か。宗教はこの連中のするようなこととは関係はない。イスラム教

は寛容と自由を奉じている。連中の仕業はイスラム精神とは全く関係のないことである。—彼らの政権略取を企てた目的は、暗黒と後進性の首長国を建てようという、病的で無謀な空想を実現し、それによって銃と鉄拳を持って、ガザの 150 万人のパレスチナ人の生命、世論そして未来までを支配しようとしている……。ここに至って、我々はこれまでのように対話の機会を求めるといふことは意味がない。我々はこの反乱行為を鎮圧し、彼らの違法な表明と執行部隊を解散させなければならない。彼らはパレスチナ人民と PLO に流血の反乱行為を行ったことを詫び、PLO のすべての基地と本部を新しくつくられたパレスチナ連合政府に引き渡さねばならない。ハマスは新政府の法と決定事項を守り、これまで行ってきて、今なおガザで続けている破壊と犯罪行為、暗殺、処刑、強盗、その他の暴力を止めなければならない。

(中略)

この紛争を単にファタ派とハマスの争闘であると単純に割り切って考える人は謝りを冒している。これは国家的プロジェクトと民兵のプロジェクトの争闘であり、……分派的な目的を得るために暗殺や殺人を行う者たちと、法を守り、祖国と人民の結束と統一を守る側との戦いなのである。……

学校や短大、大学などは学問と啓蒙のセンターであるべきで、これらを知と暗黒と憎悪のイデオロギーの宣伝の場に使って人民の結束と社会的な構造にひびを入れるようなことはしてはならない。モスクもまたアラーの神の栄光を祈る場であるべきで、政治的な宣伝の場にして、特定の集団ないし、特定の分子の便宜に供したり、武器の収蔵庫や、尋問のセンターに使ってはならない筈である。……

PLO の中央評議会は常時執行体制にあり、何時でも反乱に対応できるばかりか、その扇動者たちをパレスチナ人民の集まりから放逐することができる。反乱が生じた場合はハマスが祖国の結束を分裂させないように対処する。PLO のすべての機関とパレスチナ人の団体は祖国であれ海外であれ、我々政府から充分の信頼と援助を国家的にも人民としての法的支援を受けることになる。……

付記

2008年12月27日にはじまったイスラエル軍のガザ地区に対する攻撃は空爆と艦砲射撃により、年末年始にかけて一次休戦3時間を除き、休みなく続けられた。

ガザは帯状の地形で、その北端は古くからの都市で、特に人口が集中していることもあり、その結果、死者の数は当初の400人を超え、年明けには800人に達したが、イスラエル政府は攻撃を止める気配は見せず、積極的な攻略を行うことを宣言している。

イスラエルのガザへの進攻は、パレスチナのハマスがイスラエル南部に向けて、散発的なロケット攻撃を止めなければ断行すると宣言した上で行われた。このロケット攻撃により、イスラエル市民の数名が死亡しており、イスラエル南部の市民がロケットに怯えて安眠できない不安を募らせていることへの対処措置であるとされる。

イスラエル政府は、これは正当防衛のための戦争であり、ハマスがロケット攻撃を止めない限り攻撃を続けると宣言している。

世界の目はこの応酬に注目し、イスラエル側の死傷者の数に比して、数百倍の死傷者がパレスチナ側に出ていること、国連施設が攻撃され、破壊されたことを厳しく批判し、潘基文国連議長もイスラエル軍の休戦と即時撤退を求めている。

アメリカ側は、オバマ政権誕生を目前に控え、最終段階にあるブッシュ政権は国連安保理事会に出席させたライス国務長官に、休戦提案に対する棄権を支持させている。

注目すべきは、先にあげた非対称的な戦闘状況についての一般世論が、イスラエル側の、パレスチナ人に対する大量殺戮を戦争犯罪として糾弾しているのに対し、イスラエルを弁護する側は、この非対称性に不当性を認めていないことである。パレスチナ側市民が500人死ぬことと、イスラエル市民が5人死亡することとは等価であると見ている。これはパレスチナ側からすれば、10名のイスラエル兵を捕えれば、1000人のパレスチナ人あるいはそれ以上と捕虜交換取引が可能という計算となる。現在1名のイスラエル兵が捕虜になっているが、イスラエル側に捕らえられているパレスチナ人捕虜は1万人を超えている。

この非対称の対立関係は、太平洋戦時下の体験を持つ日本人にはよく理解できる。日本は敗戦間際には、石油は勿論のこと、ほとんどの武器弾薬を使いつくしており、物量において万倍にも達する連合軍側と戦った。身命を鴻毛の軽きにたとえ、大君の赤子（せきし）として殉国した人々を記憶に保つ日本人は少なくなった。日本は神風特攻隊で米軍艦に立ち向かう一方で、竹やりで武装した女子挺身隊が沖縄で全滅した。英国軍はドイツの大都市ハンブルグやドレスデンへの全面破壊を行った。米空軍は東京大空襲で10万人の死者を出した後、全国の主要都市を焼き払い、広島と長崎では核兵器で数十万人を犠牲にした。これは非対称の殺戮を日本人が直接体験した過去の実例である。

両手を挙げて降伏するのか、それとも無残な虐殺を迎えるのか、ハマスの闘士は自らの運命を選ぶことはできるが、果たしてそれを身内にまで強制することができるのか。——そのようなことが起こりうることを想定しながら、イスラエルは敢て全面攻略を実行するのか。このパレスチナの命運のかかった今回の残酷な大量殺戮は原子的なアフリカでの植民地戦争を想起させる。イスラエルは国連加盟国であり、独立60周年を迎えた裕福な軍事国家であるのに対し、ハマスは独立さえも認められていないパレスチナ人の闘争的一党派でしかないことを想起し、一日も早くパレスチナ人の国が建設され、ガザや西岸地区のパレスチナ人が幸福な暮らしができるように日本も努力すべきであろう。

参考文献

The Israel- Arab Reader, Walter Laqueur and Barry Rubin, editors, Pneguin Books, 2008.

Atlas of World History, Vol.1&2, 1978.

Terms of Survival, The Jewish World since 1945 Edited by Roberts. Wistrich, Routledge, London.

Henry Cattan, *Tha Palestine Question*, Croom Helm, London.

Paul Johnson, *A History of the Jews*, Harper & Row, 1987.

アンドレ・シュラキ著 増田治子訳 『イスラエル』 1955 白水社